

「なぜ、地形と地理がわかると古代史がこんなに面白くなるのか」千田総・監修/洋泉社歴史新書、864円/さて、突然ですが問題です。最盛期には500人を超える人々が定住していたとされる、青森にある巨大集落遺跡といえは？そうぞ、三内丸山遺跡。では、天智天皇の死後、672年に大海人皇子と大友皇子との間に起った大王継承争いとは？覚えていますか。壬申の乱です。では、794(鳴くよ)ウグイスとくれば？い、平安京!!...ですね。日本史と聞くと、暗記ばかりで苦痛した...という人も多いのでは無いでしょうか。かく言う私もその一人ですが、最近もう一度きちんと日本史を学び直すと色々な本を漁

っているところ。その中の一冊がこちら。歴史と地理がわかると古代史がこんなに面白くなるのか

何年に、誰が、どこで何をしたのか、が重視されがちですが、この本ではどういった歴史の出来事ひとつひとつが、不可成りなところから起ったのか/起らなければならなかったのかに焦点をあてています。先に出た問題をこの本の考え方で出し直してみよう。「なぜ、青森で「三内丸山遺跡」のような大集落が発展したのか?」「なぜ、壬申の乱の決戦地が「勢多の唐橋」だったのか?」「なぜ、京都に平安京が誕生したのか?」...過去の出来事は、場所を抜きにしては語れない。それは舞台があって初めて役者が輝くドラマのように。

地形と地図の中で古代史を見ていくことで、歴史が違った形に浮かびあがってくる!全50項目で日本史をもう一度新たな視点から学び直あ一冊。



文芸『職業としての小説家』村上春樹/スイッチ・パブリッシング、1,944円(女子評発売中)/今、世界が渴望する稀有な作家——村上春樹が考える、すべてのテーマが、ここにある。世界的にも最も高い知名度を誇りながら、これまで神秘のヴェールに包まれてきた作家村上春樹のなつたちを、全12章のバラエティ豊かな構成で、自伝的な挿話も十分に盛り込みつつ、見事な語り口、味わい深いユーモアとともに解き明かしていく、待望の長編エッセイ集。文芸誌「MONKEY」にて大好評連載の「村上春樹私的講演録」に大幅な書き下ろし150枚を加えた、読書界待望の渾身の一冊、ついに発刊! ●ビジネス『人生はもとニャンとかなる! — 明日にも、と幸福をまねく68の方法』水野敬也・長沼直樹/文響社、1,512円(9月下旬発売予定)/90万部突破の大ベストセラー『人生はニャンとかなる!』が、「もも」パワフルに帰って来ました!可愛い猫、面白い猫、憎らしい猫...前作よりエッジの交いた猫がたくさん登場します。何とも愛らしい猫たちの写真と、はたとせられる名言のエッセイ。添えられる意外な偉人たちのエピソードには更なる驚きと学びがまわっています。ページにはミシン目が入っており、切り取って好きな場所に貼ったり誰かにプレゼントすることも可能です。前作を持っている人もそうでない人も皆で楽しめる一冊。

**岡山店**(ドレミの街5F) 10:00~20:00 / 電話 086-234-6006 / ファックス 086-234-6003  
 メール hselva@po.harenet.ne.jp / ホームページ http://www.e-hon.ne.jp/SHOP72050  
**西口店**(奉還町商店街内) 9:30~18:00 日曜休 / 電話 086-250-4301  
 ファックス 086-250-4316 / ホームページ http://www.e-hon.ne.jp/SHOP72059  
**さんあて岡山店** 8:00~20:00 / 電話・ファックス 086-803-2650 / メール pselva@po.harenet.ne.jp

新書コーナーの前で立ち止まると、何冊か「読みたい」と思えるものが見つかります。

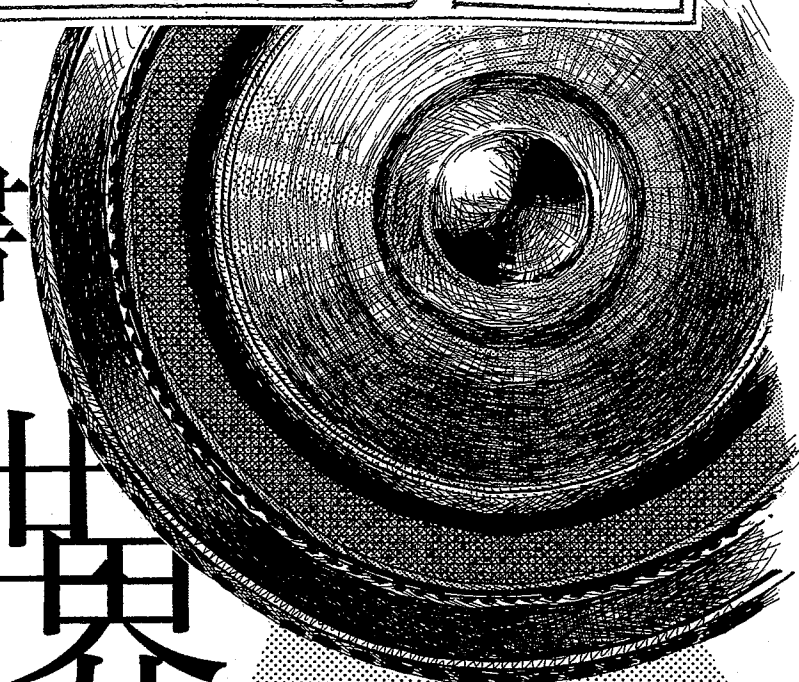
**MONTHLY SELVA**

マンストセルバ 2015年9月 第11号\*

Since 2006 04

SELVA

# 新書から見える世界



「騙されてたまるか 調査報道の裏側」清水潔/新潮文庫、842円

警察も検察のどちあげという国家の嘘、裁判所の致命的な誤判。政治の裏に潜む利害関係や原発事故にまつわる隠蔽、マスコミの虚報——この世界、何が本当で何が嘘なのか。私たちが「正しい」と信じるもの。それが全くの誤りだったり、誰かに騙されていたら。信頼していた人物や組織は自分勝手な都合や保身のために、事実を捻じ曲げ、真実を隠していたら...。今、人として、報道人として、何をすべきか。それは、警察からの情報、裁判所の判決や、マスコミの報道であるうと、「おかしいものはおかしい」と、事実を伝えること——。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の頭で考え報道する「調査報道」にこだわり、これまで桶川ストーカー事件では警察より先に犯人に辿り着き、足利事件では冤罪を暴くなど、社会を大きく動かしてきたジャーナリスト・清水潔が報道の原点を問い直あ一冊。

殺人、ハイジャック、北朝鮮による拉致など、誰もがどこかで聞いたことのある事件から、大々的に報道されることもない小さな事件まで、現場にこだわり取材を続ける著書の人生を追体験するように話は進みます。犯罪を起したならば罰を怖れ国外逃亡した容疑者たちを追って、地球の裏側まであてのまない追跡取材に出たり、地道な取材の積み重ねによってDNA型鑑定絶対神話崩壊の突破口を開いたり、警察が「家出」と判断した

## 騙されてたまるか



『騙されて  
たまるか』  
つうき

女性失踪事件では「犯人は彼じゃない」との強い思いから、直接取材を申し込んだり——とにかく「おかしい」と感じたことは徹底的に追いつける著者の姿には圧倒されるばかりです。

また、最終章では、今まさに起きている事件ではなく、過去へと遡り、太平洋戦争中の若き特攻隊員とその婚約者の人生を追うことに。何かに導かれるように今は亡き特攻隊員の生きた証を辿ることとなる婚約者が、60年の時をこえて遺品に角虫れることが叶った場面では、思わず涙。著者の「騙されてたまるか」という反骨心の裏には、常に人の心に寄り添う優しさがあるのだと感じます。戦時中、そして今、隠された真実はどこにあったのか。

ちなみに、本書で一章ずつ割いて紹介されている「桶川ストーカー事件」「足利事件」における事件の経緯や著者の取材の裏側については、それぞれ過去の著書：『桶川ストーカー殺人事件 遺言』（新潮文庫）、『殺人死はそこに隠された北関東連続幼女誘拐殺人事件』（新潮社）で更に詳しく知ることが出来ます。『桶川〜』は、折に触れて読み返したくなる名著、事件ノンフィクションの金字塔。執念とも言える取材が一筋の光を探し当て、逆境を打ち破る様は、いつ読んでもすごい!!是非多くの人に読んで欲しい本ばかりです。

### 『英語化は愚民化 日本の国力が地に落ちる』 施光恒/集英社新書、821円

「番附訳」と「土着化」を通じた国づくりを意識的かつ大規模に取り組んできた歴史を持つ国、日本。長きにわたる歴史の中で、外来の知の摂取、およびそれを日本化し、万人のものとしていく過程の巧みさ——例えば文字だ



たり、様々な制度や組織だたり——に日本のアイデンティティを見出す者も多い。今、その日本が大きく舵をきろうとしている。グローバル化の波の中で、将来を担う日本の若者たちが国際マーケットでの競争に勝ち抜き、世界の舞台で活躍するには、何よりもまず「英語」

だと言われている。小学校を早期からの英語教育、中学校では日本語の使用を原則禁止したオールイングリッシュ方式の授業。英語で行う授業が多い大学にはスーパーグローバル大学として補助金を…。そう遠くない未来、日本人の多くが「あの大学はまだ日本語で授業をしている三流大学だ」といったことを口にしている日も近いのかもしれない。止まらない英語偏重教育も、誰もが国際化のためには仕方ないと感じている。近年、大人の間でも「やり直し英語」ブームが続いているのも、英語が我々の生活の中で必要だと感じる人が増えている証拠だろう。

しかし、ここで一度立ち止まって考えたい。英語教育は必要だ。しかし、安易な英語礼賛、英語公用化政策は、果たして本当に必要なのか？…この問題、実は140年前に明治の知識人たちの間でも激論が交わされていた！黒船来航から始まる開国により、欧米列強の脅威にさらされた明治政府は、近代化のため、世界を生き抜くため、日本の公用語を英語にあることを考えた。しかし、福沢諭吉は日本語による文明開花を信じ、夏目漱石も英語ではなく、日本語での教育の発展を願った。そして日本は、彼らが選んだ「日本語」によって、見事に近代化を成功させることとなる。

しかし今、我々は「英語化」のもたらぬ未来を疑問に感じることもなく、彼らと逆の道を進もうとしている。「英語化」は一体日本にどんな変化を起そうとしているのか。「愚民化」に向け止まらない日本の英語政策の闇とは。気鋭の政治学者が英語化政策の虚実を打ち話題作！中世ヨーロッパの近代社会成立の起点となった宗教改革成功の鍵は「言語」にあることか、植民地化されることなく独立国として明治維新を成し上げた明治の偉人たちの思いとかが、読みどころは沢山。日本の未来を考えていくための一冊です。

# 英語化は愚民化

### 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 伊藤更紗/光文社新書、821円

もともと生物学者を目指していたという著者は、高校時代の「内職」として生物資料集を眺め、光GENJIより地蜘蛛集めに、恋愛より受精卵の卵割りに胸をときめかせ育った生物オタク。ネズミのように早く細かく波打つ心臓を抱えて生きること。ハチのように大脳を保持せず、群れの中で同時多発的に発火するネットワークの中で生きること。チューブワームのように光が届かない海底の熱水噴出口で硫化水素を食み、「地上」という概念を知らないまま死んでいくこと——。自分と異なる体を持つ存在のことを、突感し「変身してみたい。そんな思いが、やがて著者を「見えない人」の身体論研究へと導きます。目の見えない障害者の「見えない世界」を見てみたい。差異を取り上げてお互いにペンタリチャブルな世界の住人になるよりは、好奇の目を向けあいたい——。



ある日、全盲の「木下さん」と一緒に東京工業大学・大岡山キャンパスの道を歩いていた著者は、突然木下さんが「大岡山はやっぱり山ぞ、いまその斜面を下りているんだよね」と口にしたことに驚きます。山の斜面？曲がってしまえば忘れてしまうような15メートルほどの坂道が？今、木下さんには何が「見えて」いるのか…それは一体どんな世界なんだらう。

人が得る情報の8割から9割は視覚に由来すると言われています。しかし、これは裏を返せば目に依存しすぎている、ということ。目では見えない「世界の別の顔」を体験することで、これまで

## 目の見えない人は世界をどう見ているのか

当たり前だと思っていた世界の価値感が変わる、その瞬間を、あなたにも。

## セバ売とRanking 2015.08 岡山店 調べ

1. 火花 又吉直樹/文藝春秋 1,296円
2. 人間の分際 曾野綾子/幻冬舎、864円
3. 流 東山彰良/講談社、1,728円
4. 大放言 白田尚樹/新潮社、821円
5. スクラップ・アンド・ビルド 羽田圭介/文藝春秋、1,296円
6. 中国大減速の末路 長谷川慶太郎/東洋経済新報社、1,620円
7. ぼくたちに、もうモノは必要ない。断捨離からミニマリストへ 佐々木典士/ワニブックス、1,080円
8. 家族という病 下重暁子/幻冬舎、842円
9. 読んだら忘れない読書術 樺沢紫苑/サンマーク出版、1,620円
10. これだけは知っておきたいマイナンバーの実務 梅屋真一郎/日本経済新聞出版社、929円

## 文庫 1. 残穢 小野不由美/新潮社 637円

2. 天国までの白マイル 浅田次郎/講談社 670円
3. 白いるし 西加奈子/新潮社 464円
4. こころ 夏目漱石/角川書店 350円
5. 人間失格 大宰治/集英社 281円
6. 探偵の探偵TV 松岡圭祐/講談社 637円